

坂本龍一 + アピチャップン・ウィーラセタクン
asunc - first light -, 2017
展示場所: ワタリウム美術館 4F
©Apichatpong Weerasethakul Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE
撮影: 後藤秀二



展示アーティスト:

クリスチャン・ボルタンスキー

デイヴィッド・ハモンズ

檜皮一彦

ホアン・ヨンピン

ファブリス・イペール

JR (ジェイ・アール)

柿本ケンサク

川俣正

フランツ・ウエスト

バリー・マッギー

フィリップ・ラメット

名もなき実昌

坂本龍一

アピチャップン・ウィーラセタクン

笹岡由梨子

SIDE CORE

竹川宣彰

トモシ

UGO

梅沢和木

山内祥太

Yotta (ヨタ)

弓指寛治

渡辺志桜里

ビル・ウッドロウ

水の波紋展 2021

消えゆく風景から — 新たなランドスケープ

会期: 2021年8月2日(月) → 9月5日(日)

会場: 東京・青山周辺 27箇所

[岡本太郎記念館、山陽堂書店、渋谷区役所 第二美竹分庁舎、テマエ、ののあおやまとその周辺、梅窓院、ワタリウム美術館とその周辺]

鑑賞時間: 11:00-19:00(岡本太郎記念館は10:00-18:00、山陽堂書店は平日11:00-18:00・土11:00-17:00)

会期中無休(ワタリウム美術館は月曜休館、岡本太郎記念館は火曜休館、山陽堂書店は日祝・8/8 - 8/15 休廊)

料金: 無料(ただし、ワタリウム美術館と岡本太郎記念館は入場料が必要です)

JRの「インサイドアウトプロジェクト(フォトブース)」、Yotta(ヨタ)の「青空カラオケ」ご利用には事前予約が必要です。

主催: ワタリウム美術館 助成: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

特別協賛: 家入一真 協賛: みんな電力株式会社、株式会社大阪美装 後援: 渋谷区

会場協力: 岡本太郎記念館、山陽堂書店、市街地開発株、一般社団法人まちづくりののあおやま、第一青山ビル株、梅窓院、株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント

展示協力: 一般社団法人 Reborn-Art Festival、バビリオン・トウキョウ2021実行委員会、オオタファインアーツ、SCAI THE BATHHOUSE、CASHI

江戸時代から東京のランドスケープは火事、地震、戦争によりそのありようを変えてきた。それは、オリンピックにおいても例外ではない。1995年に開催した「水の波紋95」展では、アート作品を青山の街に点在させ、普段は歩かない都市の裏側の魅力をもてらうことを意識しキュレーションを実施した。今回の「水の波紋2021」では、変わろうとしている新旧の街並みの狭間にあえて作品を配置するよう試みた。企画者である私が地元住民ということで、子どもの頃よく遊んだ公園、同級生が住んでいた団地などを多く登場させることになった。

再開発によってこれらが消えていくことに少し感傷的になった感もあるだろう。

オリンピックと同時期に開催ということから展示場所の確保が難しかったが、表通りから見えない現在の街の風景と、若いアーティストたちの街への想いを作品として見ていただくと確信している。

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART

Tokyo Tokyo
FESTIVAL

ARTS COUNCIL TOKYO

WATARI-UM
The Watari Museum of Contemporary Art



1-17、19-26 撮影:後藤秀二
18 撮影:鈴木雄介

1 ファブリス・イベール

会場 ビクタースタジオ横の空地

たねを育てる, 2008
Fabrice Hyber
Seed And Grow



この畑は2008年にファブリス・イベール「たねを育てる」展の中で実施した屋外プロジェクト「artで街をやさい畑にする」の再生。19世紀のパリでは果物や野菜が街で育てられ、人々はこれを取って自由に食べていたという。現代都市にそうした可能性を探る実験的なプロジェクト。今回は江戸野菜を育てる。

2 トモトシ

会場 ビクタースタジオ横の空地

ミッシング・ミッシング・サン, 2021
tomotosi
Missing The Missing Sun



2021年3月、国や自分自身の状況に絶望を感じ、ぼくは国旗掲揚塔に白旗を揚げた。白旗は3週間後に引き下ろされた。その後、状況はさらに難しくなっている。せめて負けを認めることくらい許してほしいと思って、こりずに白旗を揚げさせてもらうことにした。(トモトシ)

3 名もなき実昌

会場 クローチェ神宮前ビル 屋上看板

観れても触れれない(おっきな落書き(>_<)), 2021
Namonaki Sanemasa
You can't touch it even in front of you.
(Big graffiti(>_<))



建築に顔を付けて擬人化するという試み。かつて美術館の前にあった"キースヘリング"の壁画を意識した絵画。蝋燭の煤を用いて"一切触れることなく"制作された絵画は"火が灯るであろう"を場所を見つめている。対照的な2枚の絵画は、このまちをめぐる空気感と重なるだろうか。(名もなき実昌)

4 バリー・マギー

会場 クローチェ神宮前ビル 屋上看板

無題, 2019
Barry McGee
Untitled



サンフランシスコを拠点とするバリー・マギーは、ペインティング、スカルプチャー、ファウンドオブジェなどを織り交ぜた圧倒的なインスタレーションで知られ、観る者を惹きつけ没入させるエキシビジョンが世界中の美術館やギャラリーで開催されている。

5 SIDE CORE

会場 神宮前3-35-5の空地

地球 神宮前 空き地, 2021
SIDE CORE
Earth, Jingu-mae, Vacant Lot

SIDE CORE

(石毛健太、森田貴宏、鯉、BABU、Barry McGee、EVERYDAY HOLIDAY SQUAD、Tokyo Zombie)
新国立競技場から500mに位置する空き地にて、多様な世代/国籍/バックグラウンドを持つアーティスト達7組の展示を行います。「社会が通常通りであれば、何か建てられるはずだっただろう」この空き地は都市にポツカリと空いた穴のようです。特にスケートボードやグラフィティ、または広義の意味で「遊びの場所」をテーマに、周辺環境や社会状況を反映させた作品が設置されます。フェンスに囲われた空き地を、誰でも入れる場所として放ちます。また会期中この場所を利用したイベントを開催しますので、参加希望者はSIDE COREのインスタグラムアカウント (@side_core_tokyo) やアーティスト達のSNSをご確認ください。

5-1 SIDE CORE EVERYDAY HOLIDAY SQUAD

会場 神宮前3-35-5の空地

TIME GATE, 2021
EVERYDAY HOLIDAY SQUAD
TIME GATE



本この空き地の門となる作品です。都市では古い建物が壊され、コインパーキングになり、そして新しい建物が建つという循環があります。本作は、そのようなコインパーキングの「あいだの時間」としての意味に着目し、コロナ禍やオリンピックなど大きな混乱の中で「次の時代への入り口」という意味を持って制作されました。この空き地もオリンピックに向けて取り壊され、そして次の目的が定まらぬまま現在に至っています。今回の展示を象徴する本作は、個人や小さな集団の単位で社会/公と交渉しながら、都市の未来を作っていくことを表現しています。

協力: タイムズ24株式会社

5-2

SIDE CORE 石毛健太

会場 神宮前3-35-5の空地

Alien Carrier, 2021
Kenta Ishige
Alien Carrier



時折、街の中で不法投棄されたキャリアケースを見ることがあります。この空き地も同様に、誰かが打ち捨てたそれが放置されていました。今回石毛はSNSを通じて不要なキャリアケースのドネーションを募り、ここに生えている雑草を植え、「移動することのできる鉢植」を作りました。また、この周辺地域のいくつかの場所にも同様の鉢植えを設置しています。ここに生えている多くの雑草が外来種ですが、それぞれ異なる時期に異なる場所から/異なる理由で運ばれて来て、偶然の結果として現在の生態系を作り出しました。旅の終わりに捨てられたキャリアケース、遠くから運ばれて来た雑草。石毛の作品は空き地にある小さな手がかりから、人の営みと自然環境をめぐる大きな物語への想像力を広げています。

5-3

SIDE CORE 森田貴宏

会場 神宮前3-35-5の空地

Movement, 2021
Takahiro Morita
Movement



国際的に注目を集めるストリートスケーター/スケートビデオディレクターの森田ですが、今回のオリンピックにおける金メダルラッシュによって世間のスケートボードに対する眼差しの変化に驚いていると言います。それによって製作していたプランを急遽変更し、真っ白なスケートランプを作品としました。この作品には「スケートが許可されている/許可されていない」など、通常示されているインストラクションが書かれていません。もし誰かが滑ればその跡が残る、それを見て誰かが滑りに来ても制止される可能性もあります。「ルールが無い状態で、行動を起こすこと」。森田はオリンピックに沸く社会に、それを見るスケーターたちに作品を通じて挑戦を突きつけています。

協力: 高橋ファミリー

5-4

SIDE CORE BABU

会場 神宮前3-35-5の空地

無題, 2021
BABU
Untitled



近年東京での活動も広がりを見せている、北九州の異端児BABUは地面に埋め込んだペインティングを展示しています。BABUは東京を訪れるのが難しい状況の中で、設置インストラクションと共にこの作品をこの空き地に送りました。リサイクルショップなどで集めて来た、誰かが描いた古めかしい肖像画にマスクが描き足されています。コロナ禍がいつから始まって、いつまで続いていくのか、ペインティングを「時代を超えてそこにある石碑」のように設置することによって、この時代における「時間感覚」について表現しているようです。

5-5

SIDE CORE Barry McGee

会場 神宮前3-35-5の空地

無題, 2017
Barry McGee
Untitled



世界的に活躍するグラフィティライターにしてアーティストのBarry McGeeは、2017年に宮城県石巻市にて開催された「Reborn Art-Festival」で制作した小屋の作品と、この空き地からしか見えないビルボードに新作と作る作品を展示しています。この小さな小屋は、元々は浜辺に降りる崖の上に設置されており、サーフィンに行く為の拠点として作られました。今回、この空き地の一番奥に展示されることによって小さな秘密基地のように見えます。Barry McGeeは日本のストリートカルチャーに多大な影響力を持つアーティストであるからこそ、ギャラリーや美術館ではない空き地にローカルのストリートアーティスト達の作品と共に作品が設置されていることが、国境や世代を超えるカルチャーの精神を表しています。

5-6

SIDE CORE TOKYO ZOMBIE

会場 神宮前3-35-5の空地

立入禁止/神出鬼没, 2021
TOKYO ZOMBIE



BAHK, DEKA, GAMRA, KESU, KOEN LEE, LEON KAETSU, MIKKO, SHART, TAIRA,

TOKYO ZOMBIEは10代の様々な人種のバックグラウンドをもつ、グラフィティライター/アーティスト/スケーター/ミュージシャンのチームです。多様な言語と国籍を持つ彼/彼女達は、SNSを通じて世界中のアーティスト達と繋がり、最新のアートを切り開いている存在です。本作では工事現場の仮囲い、その中に秘められた空間が存在しており、作品で埋め尽くしています。TOKYO ZOMBIEは工事現場という「入っては行けない場所に入る経験」によって、「秘密を共有する信頼関係」を作り出し、鑑賞者に世代や国籍を超えた対話を試みています。

5-7

SIDE CORE 鯨

(表良樹、藤村祥馬、森山泰地)

会場 神宮前3-35-5の空地

Paradise, 2021
Namazu
Paradise



滑り台のような構造体、M字のレリーフが設置された柱。鯨の作品は公園の遊具のように見えるが、具体的な使い方がわからない彫刻作品です。特に滑り台のような構造体は、滑ることが出来ない代わりにベンチやブランコの機能を持ち、ホースを使って植木の植物に水をあげることが出来ます。アーティストユニット鯨は「コミュニケーションをする場所」を作品を通じて作り出します。公園の遊具が閉鎖されたり、ベンチの間に仕切りがつけられたり、昨今公共空間に対する規制が高まっています。鯨は具体的な用途を示さないが、しかし人が関わることを通じて、「公共空間が生まれてくる可能性がある空間」を作り出します。展示会中にも度々彼等が訪れ作品内に滞在し、鑑賞者とのコミュニケーションを試みます。

6

ホアン・ヨンピン

会場 ワタリウム美術館 外壁

竹箒 (たけぼうぎ), 1995
Huang Yong Ping
Bamboo Broom

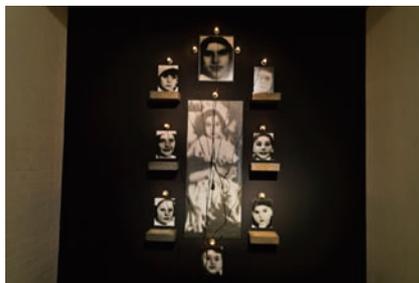


ワタリウム美術館の玄関に取り付けられた全長7mの竹ぼうぎの作品。玄関を出入りする人たちの禍を、このぼうぎが掃き出してくれるという。中国出身のアーティスト、ホワン・ヨンピンの作品。

7 クリスチャン・ボルタンスキー

会場 ワタリウム美術館 4F

モニュメント (オデッサ), 1988-89
Christian Boltanski
Monument (Odessa)



フランスを代表するボルタンスキーの作品は、失われた時間や記憶の「遺物」をテーマとする。肖像写真に小さな電球の光をあて祭壇を思わせる代表作「モニュメント」シリーズの中の作品。2021年7月に亡くなったボルタンスキーの追悼を表し展示した。

8 フィリップ・ラメット

会場 ワタリウム美術館 外部

有罪の空間, 1995
Philippe Ramette
Space of Guiltiness, Ngasaki/Tokyo



フランスのフィリップ・ラメットの作品「罪の部屋」。観客は中に入り壁に向かって立ち、自分自身とあるいは作品と対話をする。瞑想や懺悔、座禅のような行為のためのスポットをビルの立ち並ぶ都会の只中に作ります。

9 坂本龍一 + アピチャポン・ウィーラセタクン

会場 ワタリウム美術館 4F

async - first light -, 2017
Ryuichi Sakamoto + Apichatpong Weerasethakul
async - first light -



坂本龍一のアルバム『async』の楽曲を用いたアピチャポン・ウィーラセタクンとのコラボレーションによるビデオ・インスタレーション。

©Apichatpong Weerasethakul
Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE

10 デイヴィッド・ハモンズ

会場 梅窓院

ロックファン, 1995
David Hammons
Rock Fans



ロックは石、ファンは扇風機で、日本の伝統を表す庭園の中に古ぼけた文明の証としてアンティークの扇風機を置く。アメリカからやってきた自分を古びた扇風機になぞらえたのか、それとも伝統の中に静かに咲く花なのか、どちらにしてもお決まりのアイロニー（皮肉）がたっぷり仕込まれているように見える。

11 山内祥太

会場 第一青山ビル 屋外看板

我々は太陽の光を浴びると
どうしても近くにあるように感じてしまう。 2021
Shota Yamauchi
We can't help feeling it close
when we soak up the sun.



都会で生きる私たちは、常に他人の意見や思想に晒され、日々の生活を送っています。そういう類のものがいつしか自己の観念として形成され、皮膚のように私たちを包み込みます。映像として映し出されるゴリラは他人を被ることに快楽を覚えた現代人の成れの果ての姿です。(山内祥太)

12 梅沢和木

会場 北青山三丁目児童遊園

くじら公園ア Roundscape 画像, 2021
Kazuki Umezawa
Kujira-Park Arounscape Image



「くじら公園」の大きなくじらのオブジェ、それに関わる人々の時間を超えて語られる鮮やかな記憶と失われゆく風景とのコントラスト、物理的に存在し続けるオブジェとしてのキャラクター、概念としてのキャラクター、それぞれから着想を得て制作された壁画作品。(梅沢和木)

13 梅沢和木

会場 テマエ 2F

くじら公園・ア Roundscape・画像, 2021
Kazuki Umezawa
Kujira-Park, Arounscape, Image



都市の中で失われていく風景と語り継がれていく鮮やかな記憶。その対比を、今も存在し続けるオブジェと概念としてのキャラクターで表現。絵画、写真、テキストを用いて過去と現在を繋げた新たな風景として立ち上げる試み。(梅沢和木)

14

檜皮一彦

会場 旧港区立児童館奥(三角公園)

hiwadrome type : re[in-carnation], 2021

Kazuhiko Hiwa

hiwadrome type : re[in-carnation]



re: 再び、元へ
in: ~の中へ、~化する
carne: 肉片、果肉
ation: 名詞化

ひと時の肉体を得ることは、一つの花を咲かせるかのよう。
(檜皮一彦)

15

ビル・ウッドロウ

会場 旧港区立児童館奥(三角公園)

ハーフ・カット, 1994

Bill Woodrow

Half Cut



「水の波紋95」展のため石川県鶴来町で滞在制作された作品。

その時、電気や電話などのネットワークが未だに電信柱より繋がっていることに驚き、それをハサミで切ってしまったらというある意味現代社会へのアンチテーゼから生まれた作品。

16

柿本ケンサク

会場 ののあおやま

タイムトンネル, 2020

Kensaku Kakimoto

Time Tunnel



この写真作品は、コロナ以前に撮影したものを、任意のテキスト、歴史情報、過去の画像や映像を学習させたAIを通してできた。「時間」というトンネルの中で、コロナ以前・以後の人々の足跡や変化を写真のなかに再浮上させ、観るものに新たな風景を提示する。(柿本ケンサク)

17

弓指寛治

会場 ののあおやま

あの日のタイル, 2021

Kanji Yumisashi

That day's tile



久保ヨシ子さんという終戦当時19歳で大陸の花嫁候補だった方のお話を聞く機会があった。ヨシ子さんは山の手大空襲の後片付けに行き、空襲後の青山・表参道の煤けた土地でキラキラと光るタイルを見た。建物の一部分だと思われるタイルは焼け残り、色も失っていなかったという。(弓指寛治)

18

川俣正+フランツ・ウエスト

会場 ののあおやま

プレファブリケーション・東京/神戸, 1995

たんこぶ, 1995

Tadashi Kawamata+Franz West

Prefabrication, Tokyo/Kobe

Kobu (Lump)



(上部)
「タンコブ」という、ユーモアとアイロニーのあるフランツ・ウエストらしい作品。子どもがうっかり転んで大きなタンコブを作ったーそんな体験を思い出させる。

(下部)
「水の波紋95」展で青山のすべての立体歩道橋の階段下に展示されたプレハブ物置の作品。一部は同じ年に発生した阪神淡路大震災の被災地に運ばれ倉庫として活躍した。

19

弓指寛治

会場 山陽堂書店 2F

山陽道書店130年の歩み展feat.弓指寛治, 2021

Kanji Yumisashi

Sanyodo Bookstore 130 years of history featuring Kanji Yumisashi



山陽堂書店は1891年に創業し今日まで青山・表参道地区をずっと見てきた建物。

2021年5月に開催されていた「山陽堂書店130年の歩み展」に僕の新作を混ぜて頂き再編集!

1945年の山の手大空襲にスポットを当てながら戦前～戦中～戦後の青山・表参道について考える展覧会です!(弓指寛治)

20

弓指寛治

会場 岡本太郎記念館 中庭

V.S 山の手大空襲, 2021

Kanji Yumisashi

Versus Yamanote air raid



太郎さんが幼少期を過ごした家は山の手空襲で焼失した。しかし戦後再びアトリエを青山に構え、それが今は記念館になった。

僕はここであの日降り注ぐ焼夷弾を見ながら黒こげで発見された方々は何を考えていたのか、何を願っていたのかを想像して壁画を描いています!(弓指寛治)

21 JR (ジェイ・アール) インサイドアウトプロジェクト

会場 渋谷区役所 第二美竹分庁舎 前庭

JR, INSIDE OUT PROJECT, 2011

事前予約制 (Art Sticker にて予約受付中)



フランス人アーティストJRが世界中に呼びかけたアートプロジェクト。2011年からスタートし、これまでに130カ国、300,000以上の人々が参加。大都市から紛争地帯まで様々な場所で、そこに住む人々の顔写真を大きく出力して貼り、一人一人の語られない物語を街に映し出す作品。

22 UGO

会場 渋谷区役所 第二美竹分庁舎 3F

Persistence of We, 2021

ミシェル・セハ / 古家 那南 / マイケル・リキオ・ミング・ヒー・ホー / エリオット・ジュン・ライト / 磯村 暖 / ゴォ・チン・チュアン / サリーナ・サッタポン / 三好彼流 / ニミュ / 丹原健翔 / 石川 賀之

Michelle Ceja / Nanan Furuya / Michael Rikio Ming Hee Ho / Elliott Jun Wright / Dan Isomura / ゴォ・チン・チュアン Kuo Ching Chuan / Sareena Sattapon / Karu Miyoshi / Nimyu / Kensho Tambara / Yoshiyuki Ishikawa



UGOはアーティストや社会と向き合う人々が自分らしくいられるコミュニティとしてコロナ禍の2020年に結成しました。今回のインスタレーションは、今を生きる私たちの共通経験である不調・不安からの束の間の解放と思索のための装置として機能します。

23 笹岡由梨子

会場 渋谷区役所 第二美竹分庁舎 3F

Planaria, 2020-2021

Yuriko Sasaoka

Planaria



魚たちが再生と復活を成し遂げる最後のシーンにより、独自の死生観に基づく希望を提示する。タイトル「プラナリア」は体を切られても再生する生物であり、社会的に弱い存在でしかない個人としての私たちが、殺されても、何度でも復活できるということ象徴している。(笹岡由梨子)

24 渡辺志桜里

会場 渋谷区役所 第二美竹分庁舎 3F

サンルーム-元渋谷区役所第二美竹分庁舎-(他2作品), 2021

Shiori Watanabe

sans room-Former Shibuya Ward Office-



サンルームは植物、魚、バクテリア、オブジェそれぞれに接続された水が循環することにより生態系を維持する装置です。人工物が人の手から離れ、合理的なオブジェの意味を乗り越えて各々の野生に戻る姿を擬似的に成立させている。(渡辺志桜里)

25 竹川宣彰

会場 渋谷区役所 第二美竹分庁舎 3F

猫オリンピック:開会式, 2019

Nobuaki Takekawa

Cat Olympics: Opening Ceremony



政治利用と商業主義に覆われつつあるオリンピックを作家自身の亡くなった飼猫を追悼する猫のオリンピックへと置き換えた作品。ベルリンオリンピック(1936年)から今回の東京オリンピックへの接続を示唆した猫オリンピックシリーズの主要作品。(竹川宣彰)

26 Yotta(ヨタ)

集会場所 事前予約制 (Art Sticker にて予約受付中)

第一青山ビル正面入口 郵便ポスト前(青山通り沿い)

ヨタの青空カラオケ, 2017

Yotta

Karaoke under the sky



大阪・天王寺では、通称「青空カラオケ」という、公園の一部を不法に占拠しての違法な路上カラオケ店が軒を連ね、様々な問題を孕みながらも、地元にも愛されてきました。しかし、大阪オリンピック誘致運動で強制撤去され姿を消しました。私たちは、境界が溶け合うような場所とシステムを構築できないかと夢想します。(Yotta)

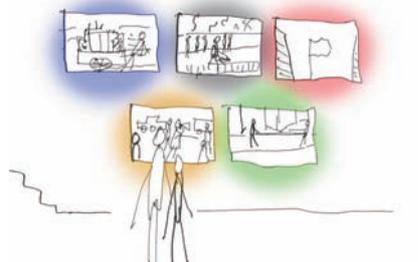
27 トモトシ

会場 オンサンデーズ 中地下 (8月11日より公開スタート)

プライベートペンディングプラン, 2019-2021

tomotosi

Private Pending Plans



オリンピックをテーマに2019年～2021年にわたって制作した5つの映像作品。制作時期によって大きく状況が違うため、トモトシの目論みやそれを受け止める人たちの様子にも大きな違いが見られる。

協力: 佐原しおり、久保田くん、原川さん、清水麻衣、宮野かおり、松尾宇人、千葉大二郎、Seiya Yamagata、吉田山、埼玉県立近代美術館、埼玉県立浦和高等学校